



柑橘系のアロマ

【千葉県】小口佳月 おぐち かづき 31歳

妊娠生活というのは、幸せなものだと思っていた。個人差もあるのだろうか。私にとつての妊娠生活は、決して楽しいものではなかった。つわりがとて重かったのだ。食べては吐きを繰り返し、血も吐いた。水も受けつけず、点滴で水分を補給した。入院は2回した。1度目はつわりの点滴入院。2度目は、情緒不安定による入院――。

妊娠6カ月のときのことだ。つわりは一向に治まらず、私はうつ状態になった。夜もほとんど眠れず、布団の中で泣いていた。そんな私を見て、夫が私の母に電話をした。「もう実家に返しますよ」と。

次の日、私は手首を切った。ナースステーションの前の個室に、

私は入院した。病室の窓は、開かないようにされた。涙が止まらなかった。毎朝、看護師さんが来て、おなかの赤ちゃんの心音を聞かせてくれる。私の子として生まれて、この子は幸せになれるのだろうか。そう思うと、また涙が出た。

病院食も、あまり食べられなかった。開かない窓から陽が差す中、のろのろと箸を動かし、口に運んだ。膳を下げてもらったあと、吐き気がこみ上げた。トイレは病室の外にある。間に合わず、床に吐いてしまった。ナースコールで看護師さんと呼び、泣いて謝った。

看護師さんはニコリと笑い、「大丈夫。びっくりしちゃったね」

そして、素早く床の物を片付け

てくれた。床をきれいになると、看護師さんがアロマの精油を持ってきてくれた。コットンに精油を湿らせ、机の上に置いた。

看護師さんが去ったあと、枕に頭を預け、ほんやりとその香りを吸った。目尻を伝う涙が次第に乾いていく。その上をまた新しい涙が伝っていくのが、不思議と心地よかった。

あのときの赤ちゃんは、無事生まれた。弱い私から、色んな人がこの子を守ってくれた。私を守ってくれた。あのときはごめんね、と娘の頭をなでた。